

まちやむら、そこに住む人びと（=ざいち）の、
知恵や生き方（=ち）から学び、実践する活動です。

No. 21 2010. 07.

京都大学

生存基盤科学研究ユニット

東南アジア研究所 「在地と都市がつくる循環型社会再生のための実践型地域研究」

高島市 椋川

亀岡フィールドステーション

日本初のキノア産地化に取り組む高校生の挑戦！

京都府立桂高等学校 佐藤庸平

桂高校キノア研究班は、日本ではあまり知られていない擬穀物キノアの研究を3年前から行っています。平成20年には各種栽培実験を行い特性の把握に努めました。平成21年にはマーケティングを目的とし、地元洋菓子店からキノアケーキ、プリン、クッキーを商品化。平成22年、日本での大規模栽培の可能性に挑戦し、「日本初のキノア産地化へ」というテーマで研究を進めています。

亀岡市保津町にある“農事組合法人ほづ”とは5年前から共同で「田植機を使ったネギ移植の研究」を行ってきました。そのため今回も真っ先に相談に伺いました。しかし「キノア」の話をしていても反応は厳しく3つの課題を頂きました。①なぜ亀岡でキノア栽培なのか？②コストはどうか？③おいしいのか？この3点をクリアするため学校で再検討を行いました。その結果、4月には保津町の二カ所で各種試験区を設けてキノア栽培を実施しています。5月には保津町特産商品開発チームのみなさんの前でキノア加工品の試食会を開催。一部は高い評価をいただき、「何点かは商品化が近い！」とのお言葉もいただきました。試験圃場には、見学者が多数来られているとの報告を頂き、4～5名の農家さんから「稲作の後作でキノアを作りたい！」との相談も来ています。自発的に広がっていくネットワークが出



写真1：キノアの試食会を開催できました。

来上がるにはもう一踏ん張りという所でしょうか。

高校生は週一回必ず保津町に行き、生育調査や栽培管理をしています。すれ違う地元の方からは「この植物なんや？」「ここはこうした方がええよ！」といった生のアドバイスも頂きます。そんな触れ合いが生徒にとっては普段できない貴重な体験となっています。また縁あって地元保育所の園児と一緒に夏野菜の栽培も行っています。生徒からは「学校よりこの野菜の方が気になる」「園児にわかりやすく説明するため定期テスト以上に勉強している」といったうれしい反応も出ています。園児が農業に興味を持ちいずれは桂高校で学んでくれる。園児を指導した高校生が保津町に興味を持ち就職や住まいを構えることができれば・・・最近はそのようなことを考えながら保津町の方々との交流を楽しんでいます。

このような地域との取組は単年度でなく継続的に行うことが重要です。まったく想定していなかったような展開に進んで行くのはワクワクしますし、それに臨機応変に対応する中で生徒は格段に成長して行くのです。

キノア研究班のメンバーは毎年社会に旅立って行きますが、新たな人材も入ってきます。いずれ研究班の名前が変わるかもしれませんが、保津町の方と築いてきた繋がりは今後とも変わることなく大切にして行きたいと考えています。



写真2：園児と一緒に夏野菜を育てています。

*亀岡FSでは、NPOとの連携だけでなく、地元保津町の皆さんと、地域の農業が育ててきた自然をいかした地域づくりに取り組んでいます。保津町は、たいへんユニークというか、人材豊富な、活力のある町で、亀岡FSとの他にもさまざまな取り組みをすすめています。今回は、そんな保津町の人々と桂高校の取り組みを紹介いたしました。（大西信弘）

守山フィールドステーション

琵琶湖 エリ漁にて

守山 FS 研究員 嶋田奈穂子

5月。今年もまた、ナレズシを漬け込む季節がやってきました。まず魚を塩漬けにして、その後、飯に漬けかえるナレズシの、塩漬けの時期です。今年、5月15日にエリ漁見学、29日にはエリ漁見学とナレズシの塩漬けを行いました。

15日の朝4時の気温は7℃。5月にしては冷たい朝でした。今年例年に比べて寒い日が続く、琵琶湖の魚の様子が気になるようです。この日は、総合地球環境学研究所の阿部健一先生もご参加くださいました。



写真1：5月15日4:30。夜明けは早い、寒い朝。

この日獲れた魚の中に、ホンモロコがちらほら見えました。ホンモロコとは、琵琶湖に春の訪れを告げる魚。ホンモロコを見ると、まだまだ冷たい日でも、「ああ、春がきたんだな」と感じるのだとか。それが、5月も中旬に入ってもまだ見ることが出来るということは、相当水温が低いことが分かります。異常な気温は、確実に琵琶湖の魚にも影響していることが分かります。

29日には、エリ漁の見学の後に、獲れた魚を分けていただいて、魚の塩漬けも行いました。この日は、東南アジア研究所の鈴木玲治さんと、子供たちに参加していただきました。

「イワシはいる??」と漁師さんにぴったりくっついて質問していたのは4歳の弟くん。大きな琵琶湖が海に見えるようです。大きさを選別するために

魚を通す網には、通る途中で抜けなくなった魚が刺さったままになります(写真2)。「はい、これで魚を抜いたって」と漁師さんからピンセットを渡されたのは、8歳のお姉ちゃん。頭からか、尾からか、どちらから抜く方が抜きやすいのか、試行錯誤して挑戦してくれました。



写真2：せっせと漁のお手伝い。

漁の後、いただいた魚をさばいて塩漬けにしました。今年「10年に一度」と漁師さんも驚くほどのカマツカの豊漁で、いただいた魚も9割がカマツカ。今年のナレズシは、カマツカズシといってもいいくらいです。そのほか、ニゴイやフナ、ハスを漬けました。魚は、うろこと内臓を取り出して、塩漬けします。子供たちはというと、お姉ちゃんは包丁を持ってせっせとうろこを取り、弟くんはさばいた魚を桶に塩漬けしてくれます。魚がどうやったらきっちり桶に並ぶのか、魚の方向を考えながら塩漬けしてくれました。体長60cmのニゴイから出てきた「浮き」の大きさには、子供たちもびっくりしたようで、きれいに洗って持って帰ってくれました。この塩漬けした魚は、今月末には飯に漬けかえる予定です。ご興味のある方がいらっしゃいましたら、ぜひご参加ください。

さて、今年で4年目になるエリ漁や塩漬けの体験を通して、気づいたことが一つあります。それは、毎年毎年、毎朝毎朝、琵琶湖の景色、気温、魚の種類と量が全く違うということ。たとえば、先週の漁で獲れた魚はアユがほとんどだったのに、今週はオイカワが大漁。去年の今頃は、9割が外来魚だった…という感じです。月に一度のニューズレターでは、とうてい追いつかない、この変化。ブログやツイッターの影響で、離れた人の気持ちや出来事、つぶやきさえも身近になった今、毎日変化するリアルタイムの琵琶湖のことも、もっとたくさんの人に身近に感じてもらえたら…と考えている今日ごろです。

朽木フィールドステーション

今夏は余呉町中河内と赤子山で焼畑

滋賀県立大学/朽木 FS 黒田末寿

赤子山と中河内で焼畑

今年の焼畑は、昨年おこなった余呉町中ノ郷の赤子山で8月12日に、余呉町最北端の中河内の共有地で8月19日に、それぞれ火入れし余呉の山かぶらを中心に播種する。いずれも地域と共同で行う。予定していた菅並での火入れは、残念だが区の要請で中止になった。

赤子山はスキー場の草山なので、7月21日に草刈りをし、昨年と同じく杉葉などを持ち込んでいっしょに燃やす。草だけだと、燃焼温度が上がらないのと、カリウムなどが少ないのが影響するのだろう、火入れの効果が低いと言われている。

中河内では、以前からお世話になっている佐藤登士彦さん（現区長）が、今回は区有林を使えるよう取りはからってくださった。現場は、集落から5〜600メートル南、一昨年までの焼畑と国道365号線を挟んだ斜め向かい、東〜東南向きの斜面で水量が豊かな小川がそばを流れる適地である。

クマザサを利用したあと燃え草に

中河内の区有林の裾は、クマザサに覆われた6〜8畝歩の緩斜面である。永井邦太郎さんによれば、ササ原の土壌は赤土で焼畑の作物がよくできる。ササは燃えやすいので、防火上全部刈り取るが、今北哲也研究員の提案で葉を採集することになった。朽木・椋川ではシカがクマザサを食い尽くし、伝統のちまきがつくれないう。そこでこれをちまきの葉に使うということである。また、ササにはいろいろ薬効があって、粉末、汁、笹茶が健康食品になる。余力があれば、これらも「くらしの森」の事業にしたいいものだ。ササは根元から刈り取り、根も起こして



写真1:2007年8月中河内の火入れ。

2、3週間後に火入れになる。火入れ後に残った地下茎から細い竹の子が出る。これもよい笹茶になるだろう。

「ヤキバタ」の用語

余呉町では、焼畑に関する用語がなかなか見つからない。焼畑を東の岐阜では「ナギ」、南隣の木之本町や伊吹町では「カノ」「カンノ」と呼ぶが、余呉町では「ヤキバタ」または「ヤマノハタケ」と呼ぶ。永井さんも佐藤さんも昔は焼畑をしていたから、用語が失われたのではなく、昔から「ヤキバタ」だったのである。ちなみに「カノ」「カンノ」は、東北から中部の日本海側の焼畑呼称である。それが滋賀の北東部に飛び地的にある理由はわかっていない。

これまで聞いた唯一の焼畑用語は、焼畑適地を「ハダレ」と呼んでいた（余呉町教育委員会報告書1991）ことだ。しかし、菅並では、「ハダレ」は焼畑を繰り返してそれ以上使えなくなった土地を指すとのことだったので、まだ確認を要する。岐阜では焼畑適地は「ムツシ」で（『白山麓の焼畑農耕』橋礼吉1995）、「ハダレ」とはかけ離れている。余呉は不思議なところである。

5年で消えた杉箸のカブラ

中河内からの帰り、永井さんと365号線をそれて旧北陸線跡の細いトンネルをくぐり、敦賀市杉箸によった。焼畑とカブラのことを聞いたかったのだが、ここでも「ヤキバタ」と言ったということだけで、焼畑をやっている人はもうなく、カブラの種もなかった。永井さんは、「5年前にこの川原を焼いてカブラを植えていたじいさんがいたのに、ああ、惜しいことをした・・・」と悔しそうだった。杉箸のカブラは余呉のカブラとほとんど同じだったそうではあるが、長年の人々の努力でできた「生きた文化財」であったことに違いはない。焼畑もまた、人々が作り上げてきた「生きた文化」であり技術である。このことを肝に銘じて、この夏、しっかりと受け継ぎたい。



写真2:バーベキューで一服。

■第26回 定例研究会

1. 日時：平成22年7月13日（火）16:00～19:00
2. 場所：守山FS（滋賀県守山市梅田町12-32）
3. 発表者：福島万紀（島根県中山間地域研究センター）

アジアの農村開発の現状と連続文化財講座 「アジアの中の亀岡Ⅱ」の意義

東南アジア研究所 安藤和雄

バングラデシュのグラミン銀行とその総裁であるユヌース氏が、ノーベル平和賞を授与したことは皆さんの記憶に新しいことでしょう。無担保のローンという、貧しい人々の経済活動の能力に信頼をおいた小規模金融事業の功績によるものでした。貧しい人々だけではなく、貧しい人々へのローン手続きなどのサービスチャージという名目の収入が、バングラデシュのNGOの経済的自立に大きく貢献しました。少なく見積もって数千はあるといわれている大小のNGOが小規模金融事業を展開したのです。ノーベル平和賞の受賞は象徴的で、バングラデシュでは「貧困の撲滅」は一息つくことができたといえるでしょう。しかし時期が重なるように、バングラデシュのNGOは、新しい問題に直面しつつあります。無担保のローンが引き起こしている多重債務（一人が複数のNGOからの負債をかかえる）の問題です。小規模金融事業への反省の言葉をNGOの知り合いからよく聞くようになりました。経済発展への過信は果たしてよかったのか、というNGOの自省の声も耳にしています。村の中でも、離村といえ、以前は外国や都市への単身による出稼ぎ者ばかりでした。しかし、子供のよりよい教育環境を求めて村から都市に移り住むことや、結婚しても家族を村に残さず、家族での離村の例がバングラデシュでもあらわれはじめています。

単身離村による海外出稼ぎは、経済のグローバルゼーションにより活発となり、アジアの開発途上国でも一般的な現象となっています。私がミャンマーのイエジン農業大学との共同研究を行っているミャンマー中央平原の90世帯ほどのある村はありふれた乾燥地帯の純農村です。ここにもグローバルゼーションの波は押し寄せています。20～40歳の男女がいる世帯では、必ず1～2名がマレーシアに3年以上の出稼ぎにでているといえます。この傾向は5～6年前くらいからはじまっています。それ以前は、国内の大都市への出稼ぎ者さえもなかったそうです。マレーシアからの帰国者は、家を新築し、車を購入し、大きな衝撃を村に与えつつあります。話をきかせてくれた中年の農婦は、「若い人はもう農業はしないよ」と言っていました。バングラデシュやミャンマーの農村が、日本の過去をなぞっていると、私は思いたくありません。しかしバングラデシュの

4. 発表内容

島根県の山村における過疎・高齢化の現状と課題
ー森林資源の活用と管理主体の形成にむけてー

*参加希望者は、京都大学東南アジア研究所実践型地域研究推進室(担当:鈴木 rsuzuki@cseas.kyoto-u.ac.jp)までご連絡ください。

NGOが危惧しはじめているように、経済発展が必ずしも村で人々が生きていくことの支えとはなっていないのです。このことを私たちは日本の経験で学んでいます。村で生き抜いていくための価値を自覚できる農村開発事業が、経済発展のアプローチと同様、または、それ以上に、アジアの開発途上国でも求められはじめているのではないのでしょうか。

私は、アジアの開発途上国の新しい農村開発のアプローチのモデルは日本にあると考えています。地域における生存基盤は、暮らしを支えてきた文化にある、と捉え、そこから農村開発（日本では地域振興）を模索するアプローチを目指しています。亀岡市文化資料館は、はやくも1989年に、「亀岡文化資料館友の会」を設立し、友の会の会員を中心に、歴史と文化をキーワードに、地域の活性化事業をはじめています。亀岡フィールドステーションが協力した、平成22年度の亀岡文化資料館連続文化財講座PART2「アジアの中の亀岡Ⅱ」もそうした事業の一つです。第1講座6月12日「アジアの農村と亀岡」（安藤和雄）、第2講座6月26日「雲南の棚田、京都の棚田」（中村均司、東南アジア研究所特任教授：前京都府丹後農業研究所長）、第3講座7月3日「東南アジアの水田の生き物、亀岡の水田の生き物」（大西信宏、京都学園大学バイオ環境学部准教授）、第4講座7月10日「亀岡の地域づくりと農村」（黒川孝宏）の連続講義です。第1講座担当の私は、亀岡文化資料館の地域活性の取り組みをアジア的な広がりの中で位置付けてみました。上述のように、亀岡市文化資料館の取り組みは、バングラデシュ、ミャンマー、ラオスでは、まさに次の農村開発のアプローチの手本となっているのです。そのことをアピールしました。また、第2、第3講座では、農学と生態学から棚田や農村の自然の農村文化的側面がアジアの農村と比較解説されました。京都の棚田や亀岡の自然が、千年以上持続している亀岡の村の暮らしという歴史や文化の具現者であるということが示されました。農学や生態学からの視点が、聴講者に新鮮な感動を与えていました。第4講座では、亀岡文化資料館の地域活性アプローチは、地域の絆(人づくり)・地域の記憶(村づくり)・地域の歴史(里山づくり)、にあると具体的な説明がありました。また、4連続講座を総合するパネルディスカッションを行いました。文化こそが地域の持続的発展をささえていく基盤であり、アジアにおける亀岡の重要な役割を市民の方々に伝えられたとすれば幸いです。